

知床連山におけるトイレ問題の現状と課題について

磯野満里子（知床財団 保護管理研究係）

知床の世界自然遺産登録の可否が正式に決定するのは、2005年7月です。候補地への推薦に伴う報道などにより、知床に多くの注目が集まりました。このことから2005年は登録の結果にかかわらず、多くの利用者が訪れると予測されます。私は環境省委託の知床国立公園内のパトロール業務において、2002年以降3年間に渡り、知床連山の状況を観察する機会を得ました。その際の記録を中心に、2004年時点での知床連山のトイレ問題についての現状と、今後の課題について触れさせていただこうと思います。

知床連山では、岩尾別登山口から羅臼岳山頂を目指すルートが日帰り登山者に人気が高く、さらに羅臼平までは縦走登山者も利用するため、この区間に登山者が集中します。この間で休憩場所となる弥三吉水、銀嶺水、羅臼平の3箇所にはトイレ場ができ、多くの尿尿が散乱しています。特に山頂直下の羅臼平は多くの人が滞留するためか、休憩広場から複数の踏み分け道がハイマツ帯に向かってのびています。気温の高い日は悪臭もひどい状況です。一方で羅臼平以北のから硫黄山へと至る縦走路上、及び硫黄山登山口までの登山道では、三ッ峰、二つ池、第一火口など野営指定地周辺にトイレ場が存在しますが、尿尿の量や臭気は気にならないレベルと言えます。

この3年間は登山者数も増加傾向にあるためか、各地点、特に岩尾別-羅臼平間の尿尿の量や明瞭な踏み分け道が増えました。また展望のよいスポットや羅臼平から縦走路の入り口、休憩地の広場からトイレ場への踏み分け道の入り口など、他人の目に付き、かつ動線上迷惑となるような場所で、尿尿が目につくケースが増えています。利用者の増加とともに、マナーが悪化しているように感じます。

実際に、知床連山の登山者がトイレ問題をどの程度意識しているのか、2004年はパトロールの際に簡単な聞き取りを行いました。7月～9月の間に、計43組の登山者に接触し、うち32組からトイレ対策に関する回答を得ることが出来ました。携帯トイレの使用、紙持ち帰り、尿尿の埋設など、何らかのトイレ対策を行っていたのは32組中14組であり、更にその中の12組が札幌など道内在住者を含むパーティーでした。また日帰りパーティーでは8組中1組、縦走パーティーでは27組中13組がトイレ対策を実施していました。サンプル数が少なく数量的な根拠を示すには説得力を欠きますが、日帰り登山よりも縦走登山者、道外よりも道内からの登山者のほうがトイレ対策を意識している傾向がみられました。縦走路でのトイレ問題が小規模である背景には、利用者の絶対数が少ない点に加え、登山者の意識も寄与していると思われます。

知床での山のトイレ対策は、一部のガイド業者による引率客への携帯トイレ配布などを含め、登山者の自主性頼みな現状です。2005年以降の利用者の増加が予測される今、特に状況のひどい岩尾別-羅臼平間については、トイレ対策は早急に取り組むべき課題と言えます。しかしご承知の通り、トイレ問題はあくまでもオーバーユースの一端です。知床連山は山系がコンパクトで動線も限られる上に、利用時期も高山植物の開花シーズンである7月に集中します。硫黄山周辺でしか見られないシレットコスミレの開花期は特に人気があり、縦走や硫黄山の日帰り登山も含めこの時期に集中するのです。2004年はピーク時の10日足らずで、羅臼平直下の大沢の植生内に5本以上の踏み分け道が生じました。また二つ池の野営指定地では、最も混雑した

日には裸地化したサイトのみでは全てのテントが張りきれず、植生内にはみ出す状況でした。このような状況から判断すると、少なくともピーク時に、これ以上環境を改変することなく、登山者を無制限に受け入れることは困難であると思われます。オーバーユース全般への対策が不可欠です。

2005年には、世界遺産登録への注目に伴う利用者の増加の他に、利用時期の集中に拍車をかけるであろう要素が存在します。硫黄山登山口に至る道道知床公園線工事に伴う利用期間の制限です。網走土木現業所が2005年1月に発表した内容によると、7月中旬から8月下旬までの50日間のみ、シャトルバスにより通行が可能となりますが、その他の期間は徒歩を含め通行できません。このため硫黄山登山口の利用が可能であり、かつ高山植物の開花期である7月中旬～下旬の半月あまりに登山者、とりわけ縦走登山者が集中することも考えられます。短期間により多くの利用者が集中し、加速度的に増大する可能性があるのです。オーバーユース全般への対策が、より差し迫った課題と言えます。

平成13年度より、環境省をはじめとする関係機関を中心に、知床国立公園の利用の適正化を目指した検討が行われています。その中では明確に「ヒグマの棲家におじゃまする」という基本思想のもと、一定のルールの下での自然体験機会の適正な提供と持続的な利用を図る方針が打ち出されています。知床岳や知床岬を含む知床半島先端部地域に関しては現在までに議論が進み、利用調整地区制度を適用しての利用者数のコントロールと、一定ルールに基づいた利用の具体化に向け、トイレ対策などルール内容の細部についても提案がなされています。一方で知床連山を含む半島基部については具体的な議論はこれからです。方針に沿って議論が進められることは確かですが、既に多くの利用の実態がある場所で具体的な対策を取るためには、屎尿やオーバーユースの影響について科学的に根拠を示すことやモニタリングが不可欠とされます。方針は明確ですが、早急に対応がとられるのは難しい現状です。

トイレ問題に限れば、現段階でも取り組むことができる課題があります。登山者に対し、知床連山のトイレの状況や自主的に協力してもらえる方法を伝える普及活動です。2004年の聞き取り結果では、自主的に対策をとっている登山者の存在が示されました。これは、各地でのトイレ問題に関する取り組みの効果とも言えるのではないのでしょうか。道外からの登山者が対策を意識していなかったのは、遠隔地からの来訪のため対策を取るのが物理的に困難である点が考えられます。しかし事前にまたは知床に入ってから、現地のトイレ問題について具体的な情報を得る機会がないことも一因と思われます。トイレ問題に関しては、知床からの現状についての発信は十分とは言えません。将来目指されるであろうオーバーユース全般への解決も、多くの利用者の協力があって有効となると考えられます。登山者頼みの解決策である点は現状と変わりませんが、まずは知床からもトイレ問題の現状などについて普及にとりかかり、将来に向け利用者の協力を得られる基盤作りを行うべきでしょう。